

東日本大震災支援情報

●自宅をなでる家族 上山益男（新潟県）



撮影 2011年6月26日 宮城県 亘理町 荒浜

津波の岩手(出身地)と水害の新潟(現在地)に人生を感じます。3月11日、建物のキシム音と吊り下げのタングステンスカイライトが揺れだしました。この日から遅れること50日目にして被災地岩手県に入ることが出来ました。岩手県花巻市は生まれ故郷でもあり、高校時代は盛岡で過ごしました。山で育ったせいか海への憧れが強く被災地には思い出の場所がたくさんあります。写真家を志す1枚のキッカケ写真は北限の海女で知られる久慈で撮った「はしゃぐ子ら」の50mm標準レンズでのモノクロ作品でした。

被災地に入り、何から撮影すべきか「撮影の焦り」と惨い光景に「言葉を失う」、峠の海岸では「ガス欠寸前」を体験しました。宮城県南三陸町志津川の被災者の家族に声をかけました。「自分の家ですか?」・ばあちゃんは顔を縦にうなづいてくれました＝写真。「東日本大震災の爪痕」は、来る11月30日～12月4日に開催される第13回トップ・マウンテン写真展(於・新潟市民芸術文化会館)の「顧問・上山作品」にて発表いたします。

●海に向けられた座像 トム岸田（東京都）



この荒浜の海の恵みによって生かされてきた人々。突然襲いかかって来た大津波は人々の日常を一瞬にして破壊し、全てを押し流してしまいました。

陸に打ち上げられて空しく横たわる魚船、露出した床に置かれた僧侶の座像。この座像は、誰が、何を思い大津波が押し寄せて来た海に向けて置いて行ったのでしょうか…

そしてこの荒浜を愛し、この海に生かされてきた被災者の故郷は何処に行ってしまうのでしょうか。

被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

●大槌高校を訪ねる 英伸三（東京都）



5月下旬、連載中の教育雑誌の取材でこの度の大地震によって壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町の県立大槌高校を訪ねた。学校は町の高台にあり、津波に襲われたときは授業中だったため、大部分の生徒は辛うじて難を逃れた。学校の体育館は避難所となり、グラウ

ンドには救援活動をおこなう自衛隊の車両とテントが並び、校舎の一部は大槌中学が間借りして授業を行っていた。さらに校内には銀行、郵便局、診療所、玄関前には臨時のバス停が設けられ、学校は地域住民が生活するための中心的役割を担っていた。ハンガーに掛けた洗濯物が並ぶ金網のフェンスの向こうに壊滅した海岸部の市街地が見えたが、生徒たちはここからドス黒い大波に飲み込まれていく我が町の姿をどんな気持ちで見ているのだろう。家々は土台を残して跡形も無い。

教室には生徒たちの真剣な顔、そして笑顔があり、大災害のあとの暗い影は少しも感じられなかったが、全校生徒303名のうち家が流されてあちこちの避難所から通う生徒も51名いるということだった。つらさを懸命に耐えながら学ぶ姿に、胸を打たれた。

●あなたの思い出守り隊に参加して 喜多章（兵庫県）



神戸学院大学 社会貢献学会 あなたの思い出守り隊 撮影・平寿夫

3.11東日本大震災発生。

16年前、阪神淡路大震災で被災した時の事が脳裏をよぎる。今回も思い出の詰まった家族写真や、記念品を瓦礫の山から探し出している姿をニュース映像で幾度も見た。職業写真家である私達も何かお手伝い出来ないものかと想いを巡らした。

被災エリアがあまりにも広大である為、どの様にコンタクトを取ればいいのか思いあぐね、とりあえず知人をたよりにお手伝いはしたものの、組織的なプロジェクトがなければ処理しきれないと思っていた折にJPS関西のメールニュースで「あなたの思い出守り隊」の写真修復プロジェクトの存在を知り、微力ながらお手伝いさせていただく事になりました。

震災から約半年が経過し、救出洗浄スキャンニング作業と進み、現在膨大な数の写真達が修復作業を待っている段階です。時間は掛かるもののデータ化された写真は劣化しないので、私も気長にお手伝いしていきたいと思っています。

このプロジェクトは、特にタイムスケジュール等ありませんので、皆さんも宜しく願いいたします。
※あなたの思い出守り隊（写真修復プロジェクト）については、ニュース488号14頁をご覧ください。

●佐藤臣里（北海道）

3/11津波の映像を呆然として見ながら大変な事が起こったと思いつつ、4月に道東に行くまで道内の被災状況は、よく知らないままだった。しかし厚岸町の総務課長補佐から、「実は厚岸町だけで約30億円の被害があったのですよ」と教えられ、広報の記録した写真を見ながら言葉を失ってしまった。厚岸は牡蠣が特産品だと言う事は知られているが、養殖施設だけで1億3,460万円の被害。また水産物流出の被害金額はあさりや昆布も含めると16億3,000万円になると言う。牡蠣は当初、地元ならば入手出来たのだが、最近になって品不足と

なり毎年秋に10日間行われる牡蠣まつりも今年は3日間に短縮となる。幸い種牡蠣は宮城から入ってきたが、ここは3年間育てて出荷をするため、数年は品不足が心配される。またあまり知られてはいないが、あさは道内生産の6～7割を厚岸産が占める主要産品だ。このあさは、養殖しているあさり礁（湖の中の畑）ごと流出し被害額は5億1,500万円となり、被災前の状況に戻るまで10年位はかかるとの事で道のりは長い。何よりも心配なのは高齢の漁業者が多く、漁を止めてしまう事だ。

一日でも早く復興が出来る事を祈っている。

●「津波は人生で二回来る！」 飯田照明（東京都）



津波にも耐えた三陸の景勝地・浄土ヶ浜（岩手県宮古市）

撮影で郡山に入る前日に大地震、津波、原発事故が起こり、決まっていた仕事も中止や延期で、この先どうなるのかと心配していたころ、被災した友人の情報も入り、行ってどんな手助けになるかわからないが4月下旬と6月上旬に一週間ずつ、車に泊まりながら三陸の被災地を回った。友人にも再会でき今まで周りに気遣い、話すに話せなかった胸の内を沢山聞くことになったがケガもなく良かったしだいだ。ただこの後、南三陸町から宮古市まで海岸沿いに訪ねた被災地では、地元の方から話しかけられることが多く、それまで話すに話せなかった津波の怖さや不安などを聞いてほしいようだったので、人生経験が少ない私ですが宮古まで、聞き役に徹しました。「津波は人生で二回来る」と言っていた漁師は、それでもこの海が大好きでここから離れられないと言う。出来れば復活した三陸の町やこの素晴らしい風景を見にきてほしい。それまで私たちは、ここで頑張っているからと言う言葉に東北の強さを感じたしだいです。

「東日本大震災支援情報」の掲載記事を募集しています。写真を添えて、総務までお寄せ下さい。